福井江亭・江橋資料の目録（一）

梶岡秀一

序

名のみ伝わって作品を知られない芸術家は少なくない。重要な人物でありながら半ば忘れられたような状態にある例もある。明治期から大正期にかけて活躍した日本画家、福井江亭はその代表例だろう。

江亭は慶應元年（一八六五）十一月二十三日、江戸に生まれた。通称は信之進。父の福井正賢は幕臣だったが、幕臣という身分が消滅しようとしていた時期のことである。幼時から絵を好んだ江亭は、漢学とともに英語と数学も修めたのち、明治十五年（一八八二）、小栗宗一に水彩画を習い、次いで瀧和亭に南画を学んだ。そして明治十七年からは、深川の三井家別邸に開かれていた画塾天真社に入って川端玉章に師事し、円山派（写生派）の画家となった。同時に、フェノロサの鑑画会にも加わり、新日本画創造の運動にも共鳴していた。

青年画家たちのための共同研究の場を設けることの必要性を主張して、同門の仲間たちとともに玉章に相談し、賛同を得て資金までも得て、実現に向けて奔走したのは江亭であり（註1）、明治二十四年に結成された日本青年絵画協会がその成果だった。この協会は岡倉天心によって日本絵画協会へ改組され、東京美術学校卒業生たちに占拠されるようになって、のちには日本美術院にも繋がるわけであるが、そこから離れた江亭が、明治三十三年、同門の結城素明、平福百穂、島崎柳塢、大森敬堂、渡辺香涯とともに結成したのが无声会である。正岡子規の写生説に呼応しながら、「自然主義」を綱領とし、浪漫主義を帯びた写生表現を多彩に繰り広げ、多くの青年画家たちを魅了し、日本美術院をも脅かす程の勢力を誇った。中心人物の中には浅井忠門下の洋画家、石井柏亭もいたが、発足時の会員六名は何れも玉章の門人であり、世間では同門の兄弟子である江亭が「無声会の大立者」（註2）と見られていたらしい。

明治三十四年には席画の「一日千枚書き」を達成して雄健の筆力を誇り、画家として活躍の目覚ましかった江亭は、早くから図案（デザイン）にも取り組んでいた。明治二十年、宮内省内事課で服制図画を手掛け、皇居御造営の際には御学問所の図を調製し、明治二十二年には応用図案会社を設立した。翌年から三年間はワグネルに従って外国の図案を調査した。そうした実績もあったからか、明治三十六年には愛知県立工業学校図案科の教授、さらには名古屋高等工業学校の講師に迎えられた。名古屋を拠点に陶磁器や染織の図案について研究を進め、工芸図案の振興にも尽力したのである。

明治四十一年、東京美術学校日本画科の教授となって東京へ戻り、後進の指導に努めたが、大正六年（一九一七）には官を辞した。東亜を周遊して各地の名勝を描いたのち、昭和期以降は千葉へ移って悠々自適の隠居生活に入り、昭和十一年（一九三六）三月八日に逝去した。

以上、略歴（註3）をたどるだけでも江亭が近代日本画の歴史において無視できない人物であることは明らかだろう。雄健な筆力を称えられた画家であるから、大作が多く伝えられていたなら重要性が見落とされることもなかったろうと思わ

れるが、残念なことに、大作が知られていない現状にある。

最近、川越市立美術館の展覧会「この絵、私が持ってました。―収集家・安齊羊造と近代日本画家との愉快な交流―」には、江亭の作品三点、江亭と熊谷直彦の合作一点、江亭を含めた諸家の合作二点、江亭の書簡一通が出品された（註4）。これによって漸く江亭の力量のみならず人柄までも窺いやすくなったが、さらに多くの作品や資料の発見が待たれる。

ここにおいて幸いにも、江亭の粉本や下図を含めた福井家資料群が現存しているのである。江亭の曾孫にあたる現代の日本画家、福井江太郎氏の特別な御厚意により拝見することを得た。江太郎氏は一般に「ダチョウの画家」として親しまれている現代のアーティストではあるが、今や江太郎氏の代名詞のようにもなっている「ライヴペインティング」は江戸時代の席画の再生であり、席画を得意とした江亭の再来として江太郎氏を見ることもできようか（註5）。そうなれば、江太郎氏が江亭の貴重な資料を保存している事実それ自体が興味深い。

保存されている資料群の中には江亭の資料とともに江亭の子である江橋の資料も多く、何れの筆になるのか判然としないものが少なくない。しかし江亭の筆か、江橋の筆かの判別は今後の課題と弁え、先ずは全体像を把握しておきたい。本稿はそのための目録であるが、紙幅の都合もあり、今回は第一弾となる。

一　目録作成の方針

江亭・江橋資料群は、江亭から江橋を経て現在の昭雄氏、江太郎氏まで福井家四代にわたり保存されているものであり、その間、様々な形で何度も整理し直されてきたに相違ないが、稿者としては、あくまでも現時点の整理された状態を保存しながら調査を進める必要があると考えた。本稿に提示する目録は、拝見した時点で一定の束をなしていた資料群の状態をそのまま再現できるように気を付けながら、資料を開いて拝見し、拝見した順に記載して作成するものである。目録に付した番号二種の内、「番号」は拝見した順番を表し、「目録番号」はそれを資料の種別に分けて付し直したものである。

二　図案資料の意義

本稿は目録を提示する第一弾ではあるが、資料群の価値を予め明らかにするため、今回の目録に載せた資料の内六点をここに紹介しておく。

最初に、目録番号2の2。四十四枚の粉本を綴じてある。「花鳥七拾壱号　数四拾五枚　玉章絵」の墨書があり、全て江亭の師である玉章の花鳥画を写したものである。江亭の画業の基盤を知ることができる資料であるのみならず、玉章の花鳥画を研究する上でも貴重な参考資料になり得ると期待できよう。

次に、目録番号2の65の下図。「安斎氏之十二幅」、「三十四年九月ヨリ十一月宮参リ四月牡丹へと」の墨書があり、江亭の庇護者だった川越の美術品コレクター、安齊羊造の需めに応じて制作された十二幅のための下図であると判る。安齊羊造旧蔵書簡群の中には明治三十四年十二月二十七日付の江亭からの書簡があり、内容も「十二幅」に関することであるから（註6）、この下図はその制作のために作られたと推察される。

同じく絵の注文主を伝える資料として、目録番号2の121がある。沢山の菊を描き、裏面には「三井家注文　二枚折　菊花」の墨書がある。この三井家とは呉服店で知られる三井家に他ならないと考えられる。なぜなら江亭・江橋資料群の中には三井呉服店に関係ある資料も遺されているからである。

そこで最後に、三井呉服店に関係ある資料三点を挙げる。

一つ目は、目録番号2の38と、2の39の二点である。何れも用紙には「上着」の二文字が薄く記され、「三井呉服店」の印章が捺され、それぞれ「図第六四〇号四葉之内其ノ四」、「図第六四〇号四葉之内其ノ三」の墨書がある。三井呉服店のための着物の図案であると判明する。江亭が三井呉服店の仕事をしていたことを物語る。事実、明治二十八年に三井呉服店の高橋義雄が意匠部を新設したとき、江亭は同門の島崎柳塢、高橋玉淵等とともに嘱託の意匠部員となり、新柄の開発

に取り組んでいたのである（註7）。制作時期は明治二十八年から明治三十七年までの間にあったろうと推測される。なぜなら越後屋が三井呉服店へ改められたのは明治二十六年であり、三井呉服店が三越呉服店へ改められたのは明治三十七年であるから。ゆえに、これが江橋の筆ではなく江亭の筆になることも明らかである。

これに関連して注目に値するのが、目録番号２の２０の下図である。これも図案のようであり、二枚の着物の振袖が翻りながら連なる図の中に「三井呉服店」という文字が記されている。これが三井呉服店の絵ビラか何かの図案であるなら、江亭は呉服の意匠のみならず広告図案をも手がけていたと判明する。三井呉服店が「デパートメントストーア」に生まれ変わる以前にも広告図案への関心を抱いていたこと、それを意匠部の江亭が担っていたのかもしれないことを想像させる。

江亭は川端玉章の高弟であり、玉章はもともと三井家に奉公していた縁から、三井家との間に深い関係を維持していた。江戸時代に円山応挙を庇護した三井家は、明治期には円山派の玉章を庇護していたわけである。玉章の画塾天真社は深川の三井家別邸にあって、江亭はそこに通っていた。玉章から厚く信頼された高弟である彼が、三井家から目をかけられるのは自然な展開だったろう。明治三十年には三井家から嘱託を受けて奈良の諸寺院や近江の三井寺、円満院等の古画を縮写した事実も伝えられている（註8）。

しかし、玉章門における江亭の後輩に杉浦非水がいることを踏まえるなら、もう少し別の意義も見えてくるかもしれない。三越呉服店で図案家として活躍した非水については専ら黒田清輝からの影響が論じられるが、反面、生涯を通じて日本画を描き続けた非水が、デザインの基礎を日本画の「写生」に求めていたこともよく知られていよう（註9）。彼が日本画の写生を学んだのは玉章の画塾と、東京美術学校における玉章の教室においてであるから、彼を三越呉服店に結び付けたのが玉章である可能性も充分に想定できる。

関連する事実として、非水が无声会に参加していたことも注目に値しよう。彼のデザインの形成に玉章門下の青年画家たちの姿勢や无声会の思潮が作用した可能性が見えてくるからである。そもそも自然主義から装飾、図案への移行は无声会の運動における後期の大きな傾向でもあった（註10）。ここにおいて日本画の大家だったと同時に図案家としても実績のあった江亭という存在が、小さくない示唆を与え得るのではないのだろうか。江亭には生前に刊行された『東亜周遊画帖』と題する画集があるが、写実を極めたような壮麗な風景画、山水図、花鳥図が多数収録されている中には、リズム感に富んだ装飾性を見せる作品もあり、そこにも写生から装飾性への転移や、写生と図案との融和が窺えよう。江亭を中心とする玉章門下の青年画家たちの間にそのような傾向があったとするなら、非水のようなデザインの巨匠が生み出されたのも必然ではなかったろうか。

江亭・江橋資料群が、近代日本美術史における失われた環を、浮かび上がらせつつ微かに繋ぐ意義を有するのではないかと期待したい所以である。

註

（1）福井江亭「回顧録（私の過ぎ越しかた）」、『足印録（朝鮮から支那へ！）附 私の過ぎ越しかた』。同書については、福井江太郎氏から複写を御提供いただいた。

（2）春蘭道人・秋菊道人編『当世画家評判記』（一九〇三年）、一〇二頁。

（3）以上の略歴は主に、細野正信・松浦あき子編「作家評伝」、日本美術院百年史編集室企画編集『日本美術院百年史』第一巻上（図版編）（一九八九年、日本美術院）、六五七－六五八頁に基づくが、生前に書かれた略歴として、前掲註1「回顧録（私の過ぎ越しかた）」、前掲註2『当世画家評判記』のほか、金井確資『日本美術画家列伝』（一九〇二年）、川島正太郎編輯『現今名家書画鑑』（一九〇二年）等も参照した。

（4）折井貴恵（川越市立美術館）編集『〈小江戸文化シリーズ〉3　この絵、私が持ってました。―収集家・安齊羊造と近代日本画家との愉快な交流―』（二〇一六年、川越市立美術館）。この展覧会図録に掲載された江亭の作品は六点。江亭筆《木綿園主人甲州旅行図》、明治三十二年、絹本着色一幅（図39）。江亭筆《日の出に綿花・月に沢潟》、明治四十四年、絹本着色双幅（図40）。江亭筆《竜虎》、大正四年、紙本墨画双幅、養寿院蔵（図41）。熊谷直彦と江亭の合作《三社図》、絹本着色三幅対（図44）。《諸家詩書画張交屏風》六曲一隻における江亭の画一面、絹本着色（図16の88）。江亭を含めた諸家二十三名の合作《稲荷祭祀図》、明治四十三年、紙本着色一幅（図46）。以上のほか、江亭から安齊羊造宛の明治三十五年三月二十二日付の書簡（図56）も掲載されている。さらに、巻末の資料「安齊羊造旧蔵書簡リスト」には江亭から安齊羊造宛の書簡二十七通の概要が記され、図版はないが、内容を知ることができる。

（5）梶岡秀一「歩み、走り、舞うダチョウたち―福井江太郎とダチョウ画の軌跡」、福井江太郎『ダチョウ　福井江太郎作品集』（二〇一三年、求龍堂）。

（6）前掲註4『この絵、私が持ってました。』、一〇六頁。

（7）株式会社三越本社編『株式会社三越100年の記録』（二〇〇五年）、三五頁。前掲註1「回顧録（私の過ぎ越しかた）」で江亭自身は明治二十一年の出来事として語っているが、三井呉服店に意匠部が新設されたのは明治二十八年であり、記憶に誤差があったろうかと想像される。

（8）川島正太郎編輯『現今名家書画鑑』（一九〇二年）の「福井江亭氏略伝」。前掲註1「回顧録（私の過ぎ越しかた）」にも調査旅行の記事がある。「三井呉服店では、高橋義雄氏を主任として意匠部を新設し、大に意匠図案の改良に尽されました。私も亦委嘱を受け高橋氏と共に京都、新潟、足利、桐生等を遍歴して調査を致しました。此等の地は三井とは三百年前より取引して居ました関係上、非常に良い材料を得ましたのであります。それから三井呉服店営業の方針も大に新生面を開きまして、社会の耳目を集注したのであります。紅葉山人も丁度此企に与かられて居たので、始終往復して居ました」。この調査旅行の時期は定かではないが、意匠部の新設は明治二十八年で、それ以降と考えるなら、各地の寺院を調査した時期に近似する。むしろ同一の旅行を指していようか。多分、明治二十九年七月以降の、高橋義雄が仕入係の山岡才次郎、意匠係の江亭、調査係の中村利器太郎を率いて東北と北越の機業地を巡回した旅行とも同一ではなかろうか。神野由紀『趣味の誕生　百貨店がつくったテイスト』（一九九四年）、七五頁、一二五頁。

（9）重信文雄「杉浦非水展によせて―余話」、たばこと塩の博物館編『日本モダンデザインの旗手　杉浦非水展』（一九九四年）、九二頁。「当時図案科に学ぶものは西洋画を勉強したが、入学した一年余りは植物を主体とした日本画の授業が続いた。確かに日本画の描法は、デザインを専攻するに当たって大いに役立つことが多かった」。

（10）菊屋吉生「自然主義から非自然主義へ―明治後期日本画の新様相」、山口県立美術館／菊屋吉生編集『明治日本画の新情景　ひと・まち・しぜん』（一九九六年、山口県立美術館）、七五－七六頁。庄司淳一「无声会再考 ―明治30年代の「自然主義」（1）―」、『宮城県美術館研究紀要』第一号（一九八六年）、八頁。

福井江亭・江橋資料目録

番号	目録番号		種別	内　　容	数量	寸法（㎝）	材質	備　考
1	2	1	粉本・下図	花鳥・人物・山水画等、和綴本、約106頁（+表・裏表紙）、表・裏表紙の裏に墨書。	約106頁+表紙	19.6×13.7（各）	紙	頁間に山水図の写真1枚+新聞切抜1枚。
2	2	2	粉本・下図	玉章花鳥画の粉本、墨書「花鳥七拾壱号　数四拾五枚　玉章絵」。江亭住所印。	44面+表紙	28×38（各）	紙	
3	2	3	粉本・下図	花鳥図、落款「龍斎」、白文印「龍斎蔵印」、朱文印。 （裏面）墨書「花鳥四拾六号」。江亭住所印。	1枚	77.5×36.7	紙	
4	3	1	資料	商品の印刷物、円形、印字「日本パーカライジング株式会社」「フェルボンド」等。 （裏面）朱色のペン書「小台町七一二　羽富平吉　自転車製作所」。黒のペン書。	1枚	直径27	紙	
5	2	4	粉本・下図	切れ端。	1枚	7×6.5	紙	
6	2	5	粉本・下図	人物図（羅漢図）、着色、落款「義童　□□」、朱文印。 （裏面）墨書「人物卅六号」。江亭住所印。墨書「拾四号」に字消し線。朱文印「長谷川文庫」に字消し線。	1枚	102.6×42.3	紙	
7	3	2	資料	墨書「智光請童女　壱周忌志」、文字のみ。	1枚	24.4×18.8	紙	二つ折りの紙の半分に墨書。
8	2	6	粉本・下図	猿図。	1枚	136×69	紙	
9	2	7	粉本・下図	猿図。 （裏面）猿図。	1枚	98.5×49.7	紙	
10	2	8	粉本・下図	鶴図・鯉図・猿図。 （裏面）鍾馗図。	1枚	87×69	紙	
11	2	9	粉本・下図	猿図・折鶴図・松図。 （裏面）雄鶏・雌鶏・ひよこ図。	1枚	95×37	紙	
12	2	10	粉本・下図	鶏図、猿図。 （裏面）鶏図。	1枚	96.5×27.5	紙	
13	2	11	粉本・下図	猿図。	1枚	66.5×64.5	紙	
14	2	12	粉本・下図	虎図。	1枚	54.3×41	紙	報知新聞昭和24年12月7日号に墨画。
15	2	13	粉本・下図	山図、墨書「四十九号」、印章「長谷川文庫」。	1枚	27.5×40	紙	
16	3	3	資料	花鳥図、版画。	1枚	27×22	紙	
17	2	14	粉本・下図	武者絵、墨書「菊地武重」。	1枚	72.5×43	紙	
18	2	15	粉本・下図	中国人物図。	1枚	75.5×54	紙	貼り合わせ部分が外れかかり、要注意。
19	3	4	資料	版画「民権新聞第壱号附録」「巴女補衣之図」。	1枚	45.5×29.5	紙	

番号	目録番号		種別	内　　容	数量	寸法（cm）	材質	備　考
20	2	16	粉本・下図	桜･鈴図（護花鈴図？）、桐花紋図。	1枚	39.2×27.5	紙	図案か。一部切抜き。
21	2	17	粉本・下図	仙女図。	1枚	30×23 （～28.5）	紙	
22	2	18	粉本・下図	山水図。	1枚	33×25	紙	
23	2	19	粉本・下図	山水図。	1枚	27×2.5	紙	
24	2	20	粉本・下図	三井呉服店図（複数の呉服が翻りながら連なっている図か）、画中に「三井呉服店」の文字。 （裏面）鉛筆の描き込み。	1枚	27×19	紙	三井呉服店の絵ビラの図案か。
25	2	21	粉本・下図	人物画（武士、子ども）。	1枚	34×23	紙	
26	2	22	粉本・下図	人物画（武士、子ども）。	1枚	42×26	紙	
27	2	23	粉本・下図	虎図。	1枚	25×36	紙	宮田戊子「虚子小論」掲載の雑誌の1枚に墨画。
28	2	24	粉本・下図	花図。 （裏面）武者絵。	1枚	33.5×102	紙	
29	2	25	粉本・下図	中国人物図。墨書「癸卯保十四年八月三日」、白文印、朱文印。	1枚	109×78	紙	
30	2	26	粉本・下図	中国人物図。 （裏面）墨書「人物八号」。江亭住所印。墨書「拾三号」に字消し線。朱文印「長谷川文庫」に字消し線。	1枚	39×52	紙	目録番号2の25の部分か。
31	2	27	粉本・下図	（書画ともになし）	1枚	35×27	紙	目録番号2の29の部分か。
32	2	28	粉本・下図	（人物の部分か）	1枚	37×26.5	紙	目録番号2の29の部分か。
33	2	29	粉本・下図	人物図（女性）。	1枚	37×77	紙	
34	3	5	資料	版画「板尾新次郎作　鉄製鷲出品者 齋藤政吉」「東陽堂印刷」。	1枚	18.8×15.7	紙	
35	2	30	粉本・下図	鷲図。	1枚	24×32	紙	
36	2	31	粉本・下図	鷲図。	1枚	27×36.5	紙	
37	2	32	粉本・下図	鷲図。	1枚	29×18	紙	
38	2	33	粉本・下図	鷲・旭日図。	1枚	34.5×52.5	紙	
39	2	34	粉本・下図	波涛図。 （裏面）波涛図。	1枚	33.5×28.5	紙	
40	1	1	本画	江橋筆鷲図、紙本墨画淡彩、落款印章。	1枚	134.5×59.5	紙	まくり。
41	2	35	粉本・下図	呉春筆山水図。墨書「呉春　□」。	1枚	26.5×37.5	紙	
42	2	36	粉本・下図	呉春筆山水図。墨書「呉春　□」。 （裏面）墨書「山水拾七号」。江亭住所印。白文印。	1枚	26.5×38	紙	
43	2	37	粉本・下図	呉春筆山水図。墨書「呉春　□」。	1枚	26.5×38	紙	

番号	目録番号		種別	内　　容	数量	寸法（cm）	材質	備　考
44	2	38	粉本・下図	図案、薄い墨書「上着」、墨書「図第六四〇号四葉之内其ノ四」、朱文印「三井呉服店」。	1枚	27.5×39	紙	三井呉服店のための着物図案か。
45	2	39	粉本・下図	図案、薄い墨書「上着」、墨書「図第六四〇号四葉之内其ノ三」、朱文印「三井呉服店」。	1枚	27.8×39.2	紙	三井呉服店のための着物図案か。
46	2	40	粉本・下図	西洋人物図（有翼の女性数人）。	1枚	27.7×39.5	紙	
47	2	41	粉本・下図	鳥図。 （裏面）版画（蝶図に落款「江亭」）。	1枚	28×19.5	紙	江亭筆蝶図の版画の裏面に墨画。
48	3	6	資料	版画（花鳥図）。	1枚	27.8×19.5	紙	
49	3	7	資料	版画（花鳥図）。	1枚	27.8×21	紙	
50	3	8	資料	版画（花鳥図）、一部に鉛筆の描き込み（旭日図か）あり。	1枚	27.6×17	紙	
51	2	42	粉本・下図	人物図、獅子図。	1枚	17.5×24	紙	
52	2	43	粉本・下図	人物図（合戦図）。	1枚	24.5×24	紙	
53	2	44	粉本・下図	人物図（合戦図）。	1枚	24.5×24	紙	目録番号2の43の部分か。
54	2	45	粉本・下図	人物図（合戦図）。	1枚	10.5×24.2	紙	目録番号2の43の部分か。
55	2	46	粉本・下図	人物図（合戦図）。	1枚	30.3×24	紙	目録番号2の43の部分か。
56	2	47	粉本・下図	人物図（合戦図）。	1枚	8.5×20	紙	目録番号2の43の部分か。
57	2	48	粉本・下図	人物図（合戦図）。 （裏面）人物図（合戦図）。	1枚	22×24.4	紙	目録番号2の43の部分か。
58	2	49	粉本・下図	山水・人物図。	1枚	20.5×21	紙	目録番号2の43の部分か。
59	2	50	粉本・下図	山水・人物図（合戦図）。	1枚	16.5×24	紙	目録番号2の43の部分か。
60	2	51	粉本・下図	山水図。	1枚	16.5×24	紙	
61	2	52	粉本・下図	贈答品図。	1枚	24.5×33	紙	
62	2	53	粉本・下図	竹図。	1枚	132.5×41	紙	
63	2	54	粉本・下図	典信筆象図。墨書「典信」。朱「□」。	1枚	38.5×27	紙	
64	2	55	粉本・下図	人物図、花鳥図。	1枚	24.3×32.5	紙	
65	2	56	粉本・下図	山水図。 （裏面）墨書「横物山水」。	1枚	42×126.5	紙	
66	2	57	粉本・下図	山水図。	1枚	97×42	紙	
67	2	58	粉本・下図	山水図、墨書「瑞霊満山」。 （裏面）山水図、墨書「霜林煙靄」。	1枚	123.5×42.5	紙	
68	2	59	粉本・下図	山水図。 （裏面）山水図、図案3種（鶉、美人、湯浴美人）。	1枚	39×55.4	紙	
69	2	60	粉本・下図	花鳥図。 （裏面）鶴図、寺院図。	1枚	99.5×68	紙	
70	2	61	粉本・下図	寺院図（清水寺か）。	1枚	22×51	紙	

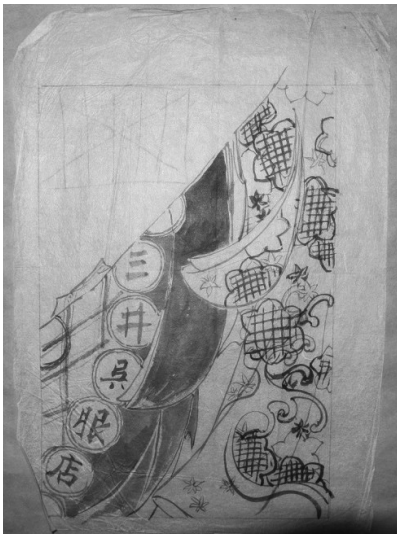
番号	目録番号		種別	内　　容	数量	寸法（cm）	材質	備　考
71	2	62	粉本・下図	風景画。 （裏面）印刷物「立川　川上カラー現像所」「カメラはカワカミ」等の文字。	1枚	26×38	紙	チラシ裏に墨画。
72	2	63	粉本・下図	山水図。 （裏面）山水図。	1枚	107.5×36	紙	
73	2	64	粉本・下図	山水図。	1枚	69.5×97.5	紙	
74	2	65	粉本・下図	衣桁図、千歳飴等の図、墨書「安斎氏之十二幅」「三十四年九月ヨリ十一月宮参リ四月牡丹へと」。 （裏面）牡丹。	1枚	161.5×71.5	紙	
75	2	66	粉本・下図	虎図、鶏図、山水図、花鳥図。 （裏面）鶏図。	1枚	99.5×68.5	紙	
76	2	67	粉本・下図	山水図（風景画）。	1枚	70×97	紙	
77	2	68	粉本・下図	花鳥図の一部か。	1枚	9×11.5	紙	切れ端。
78	2	69	粉本・下図	旭日に松鶴図。	1枚	133.5×50.5	紙	
79	2	70	粉本・下図	梅に狗子図。 （裏面）松鶴図、墨書「梅犬」「松鶴」。	1枚	128×43	紙	
80	2	71	粉本・下図	御所人形図、墨、鉛筆。 （裏面）胡粉。	1枚	36.5×25.5	紙	
81	2	72	粉本・下図	御所人形図、鉛筆。胡粉（裏面の刀の図か）。 （裏面）人形の刀の図か。	1枚	36.5×25.5	紙	
82	2	73	粉本・下図	百福図。	1枚	27×73.5	紙	描かれている人数は45人。
83	2	74	粉本・下図	花鳥図。	1枚	131×49.5	紙	
84	2	75	粉本・下図	花鳥図、着色。	1枚	22×39.5	紙	
85	3	9	資料	版画2枚の内。六歌仙図。絵の枠外の左下に「舎」印。	1枚	27.5×38	紙	目録番号3の10と一緒に紙紐で綴じてある。
86	3	10	資料	版画2枚の内。豊國筆六歌仙図。「豊國画」。極印。印。	1枚	27.5×38	紙	目録番号3の9と一緒に紙紐で綴じてある。
87	2	76	粉本・下図	能舞台図、扇面。 （裏面）胡粉。	1枚	幅46、 直径16	紙	
88	2	77	粉本・下図	能楽図、扇面。 （裏面）胡粉。	1枚	幅46、 直径16	紙	
89	2	78	粉本・下図	虎図、鹿図。 （裏面）虎図。	1枚	108.5×49	紙	
90	2	79	粉本・下図	武者図（楠公父子図か）。	1枚	80.5×37.5	紙	
91	2	80	粉本・下図	薔薇図、着色。 （裏面）達磨図。	1枚	31×45	紙	
92	2	81	粉本・下図	鳥図、着色、落款「江橋」、白文印「江橋印」。 （裏面）高士・鶴図。	1枚	53.2×34.4	紙	

番号	目録番号		種別	内　　容	数量	寸法（cm）	材質	備　考
93	3	11	資料	菓子店の包装紙、図中に「龍山人之詩」、図の枠外に朱の印字「御菓子處高木」。	1枚	25×34.8	紙	
94	2	82	粉本・下図	人物図（提灯を持って歩く和服の女性）。	1枚	27.5×24	紙	
95	2	83	粉本・下図	人物図（渓流に釣人）。	1枚	24×27.8	紙	
96	2	84	粉本・下図	能楽図（石橋か）、扇面。	1枚	幅46.5、直径15	紙	
97	2	85	粉本・下図	人物図（和服の女性と提灯を持つ従者の男性）、墨・朱（女性の帯と襟のみ墨）。	1枚	24.5×33.5	紙	
98	2	86	粉本・下図	花鳥図（五位鷺5羽か）。 （裏面）花鳥図（水仙、五位鷺か）。	1枚	150.2×36	紙	
99	2	87	粉本・下図	人物図（農業に勤しんでいる家族）、着色。 （裏面）花鳥図。馬図。一部に「文墨会紀念甲斐国桂瀑記碑建設賛成諸君芳名」（明治27年3月）の印刷物を貼り込んで使用。	1枚	132×61	紙	
100	2	88	粉本・下図	花鳥図（鴉）。着色。 （裏面）岩・花図。着色。	1枚	133.5×31	紙	
101	2	89	粉本・下図	花鳥図。	1枚	21×27	紙	
102	2	90	粉本・下図	図案（竹、紅葉、波・千鳥）。墨書「晩秋十月庚寅」。 （裏面）図形。	1枚	26×20	紙	
103	2	91	粉本・下図	花鳥図（枯木に雀）。 （裏面）花鳥図（菊、雀）。	1枚	116.5×40.5	紙	
104	2	92	粉本・下図	牛図、墨書「嘉永寅三月七日雅章」。 （裏面）墨書「花鳥卅壱号」、江亭住所印、白文印。	1枚	44.5×32.1	紙	
105	2	93	粉本・下図	樹木図、稲荷社の鳥居図。 （裏面）墨書「山水八号」「庚寅秋日写 江亭蔵」、朱文印「江亭□」、江亭住所印。	2枚	37×20、37×12.5	紙	接合部が外れて2枚に分かれている。
106	2	94	粉本・下図	山水図。 （裏面）虎図。	1枚	132.6×50	紙	
107	2	95	粉本・下図	花鳥図（秋草）。	1枚	124×55	紙	
108	2	96	粉本・下図	山水図。	1枚	97.5×35	紙	
109	2	97	粉本・下図	不動明王図、墨書「四段」「拾一」。	1枚	39×27.5	紙	
110	2	98	粉本・下図	薔薇図。	1枚	23×27	紙	
111	2	99	粉本・下図	山水図。	1枚	121×46.5	紙	
112	2	100	粉本・下図	山水図。	1枚	99×52	紙	
113	2	101	粉本・下図	山水図。 （裏面）貴人図、墨書「伊勢小津山水」。	1枚	137.6×57	紙	
114	2	102	粉本・下図	虎図、着色。	1枚	34×24.5	紙	

番号	目録番号		種別	内　　容	数量	寸法（cm）	材質	備　考
115	2	103	粉本・下図	馬図（2頭）。	1枚	13×18	紙	
116	2	104	粉本・下図	虎図。 （裏面）墨書「トラ一頭」。	1枚	77.5×43	紙	
117	2	105	粉本・下図	犬図。	1枚	24.4×30	紙	
118	2	106	粉本・下図	童女図、着色、鉛筆、鉛筆書「羽人形　草履」。	1枚	38×29	紙	
119	2	107	粉本・下図	山水図（家屋）。	1枚	40×31.5	紙	
120	2	108	粉本・下図	山水図、墨・朱。	1枚	172×86.5	紙	
121	2	109	粉本・下図	風景画（寺院）。 （裏面）庭園図。	1枚	70.9×51	紙	
122	2	110	粉本・下図	千代田城図。	1枚	108.3×52.7	紙	
123	2	111	粉本・下図	山水図（八曲屏風の構想）。	1枚	24×70.8	紙	
124	2	112	粉本・下図	山水図（八曲屏風の構想）。	1枚	26×70.6	紙	
125	2	113	粉本・下図	山水図（八曲屏風の構想）。	1枚	24.7×70	紙	
126	2	114	粉本・下図	山水図（八曲屏風の構想）。	1枚	24.2×62	紙	
127	2	115	粉本・下図	山水図2面（八曲屏風の構想）。	1枚	46×70.6	紙	
128	2	116	粉本・下図	王昭君図、着色、朱文印「川端蔵」、朱文印。 （裏面）墨書「人物卅四号、江亭住所印、墨書「王昭君之図 川端蔵」。	1枚	127×93	紙	
129	2	117	粉本・下図	王朝美人図、着色。	1枚	113.5×53	紙	
130	2	118	粉本・下図	群猿図。 （裏面）墨書「花鳥廿貳号」、江亭住所印。	4枚	50.5×55、41×27、55.5×26.5、50.5×55.5	紙	接合部が外れて4枚に分かれている。
131	2	119	粉本・下図	猫・菊図。 （裏面）墨書「三尺」「猫菊花」。	1枚	150×69.5	紙	
132	2	120	粉本・下図	菊図、団扇型。	1枚	25×24.2	紙	
133	2	121	粉本・下図	菊図。 （裏面）鳥居図、宝珠図、墨書「三井家注文」「二枚折 菊花」。	1枚	158×63	紙	
134	2	122	粉本・下図	鶴図、墨・胡粉。	1枚	132×61.5	紙	
135	2	123	粉本・下図	山水・人物図。 （裏面）山水・人物図（両手に鳥籠を下げる老人）。	1枚	130.5×43	紙	

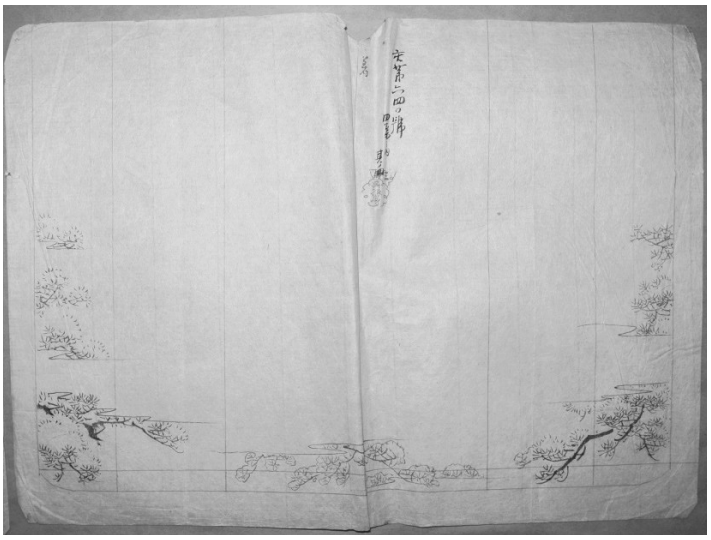
※目録中、「内容」として記載した中の「山水図」「花鳥図」等の記述は、作品名ではなく、描かれた絵の主題の種類を表しているに過ぎない。鉤括弧に括って記した「梅犬」「猫菊花」等の語は、資料内に墨書されてある語であり、これが正式な作品名を表している場合がある。

※資料の大半は形の整ったものではなく、破れの甚だしいものや、接合部の外れかかったもの、無数の皺で縮こまったもの等も多く、寸法を正確に計測することができない。ゆえに寸法は大体の目安を示しているに過ぎない。

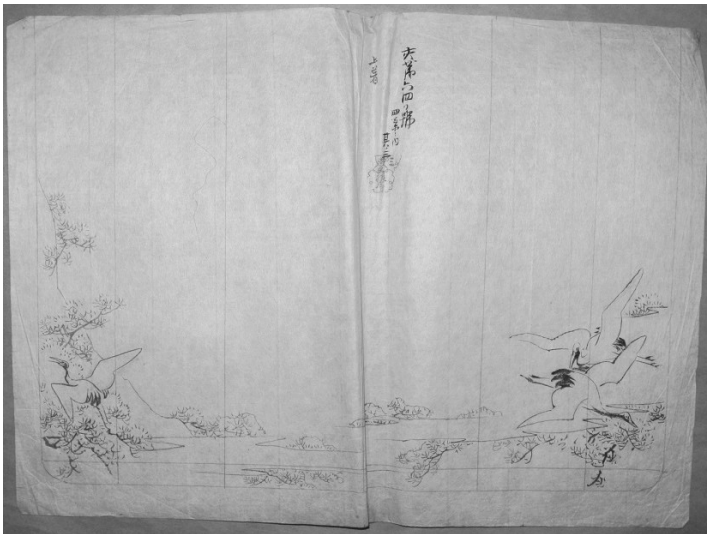


目録番号２の 20

目録番号２の２



目録番号２の 38



目録番号２の 39